

多重防御の基礎となる防潮林の形成に向けた植物社会学的調査の実施

岩沼市の沿岸部には、長年に渡り、維持されてきた広大な海岸林が存在していました。東日本大震災の津波によって、大半が失われましたが、航空写真を確認すると、ところどころに森林が残っているのがわかります。これらの残存している森林は周囲よりやや高い土地のために残ったと考えられます。

そこで、今回の調査では、沿岸部の防災林を今後考えていくために、海岸林にどのような植物が生育しているのかを2012年10月1日から3日の日程で調査を行いました（調査地点は右図の通りです）。

沿岸部の防潮林の構成樹種は、クロマツやアカマツばかりかと思われましたが、海に近いという悪条件にもかかわらず、里山的利用がなされた松林やコナラ、オオヤマザクラなど多様な樹種が見られました（写真1）。林床には、ウメモドキ、イヌツゲ、シロダモ、ヤマツツジ、ヤブコウジ、アシボソ等の多様な低木、地被植物が、津波の被害を乗り越えて、たくましく生育していることがわかりました。この一方で、タブやスダジイ等の常緑広葉樹は、全く出現しませんでした。海岸堤防沿いのクロマツ林は、すべて倒壊しましたが、外来種のニセアカシアが残存していました。ニセアカシアは生長が早く、コナラなどの在来種を駆逐する可能性があります。

津波により、どのような樹木が倒壊し、どのような樹木が地被植物、草本類が残っているかを生態学的に検証することは、今後の地域の環境に即した海岸林を創っていく上で、重要な基礎となります。

相の釜集落付近には愛林碑が建てられていました（写真2）。ここには、明治から昭和初期にかけて沿岸部に様々な困難を乗り越えて植林を行ってきたことが書かれてあり、“緑の汀”をつくりだす志が書いてありました。

また、南浜中央病院付近の沿岸林調査中に、境明神社の基礎が残されており、周辺地域を探し、藪の中から倒壊した庚申塚を発見しました（写真3）。農業と深く関わる神事をまつる神社が地域の中で深く息づいてきたことがわかりました。

私たちはこのような沿岸林の植生調査やかつての暮らしをていねいにほりおこすことにより、郷土の文化を継承していく復興を支援していきたいと考えます。



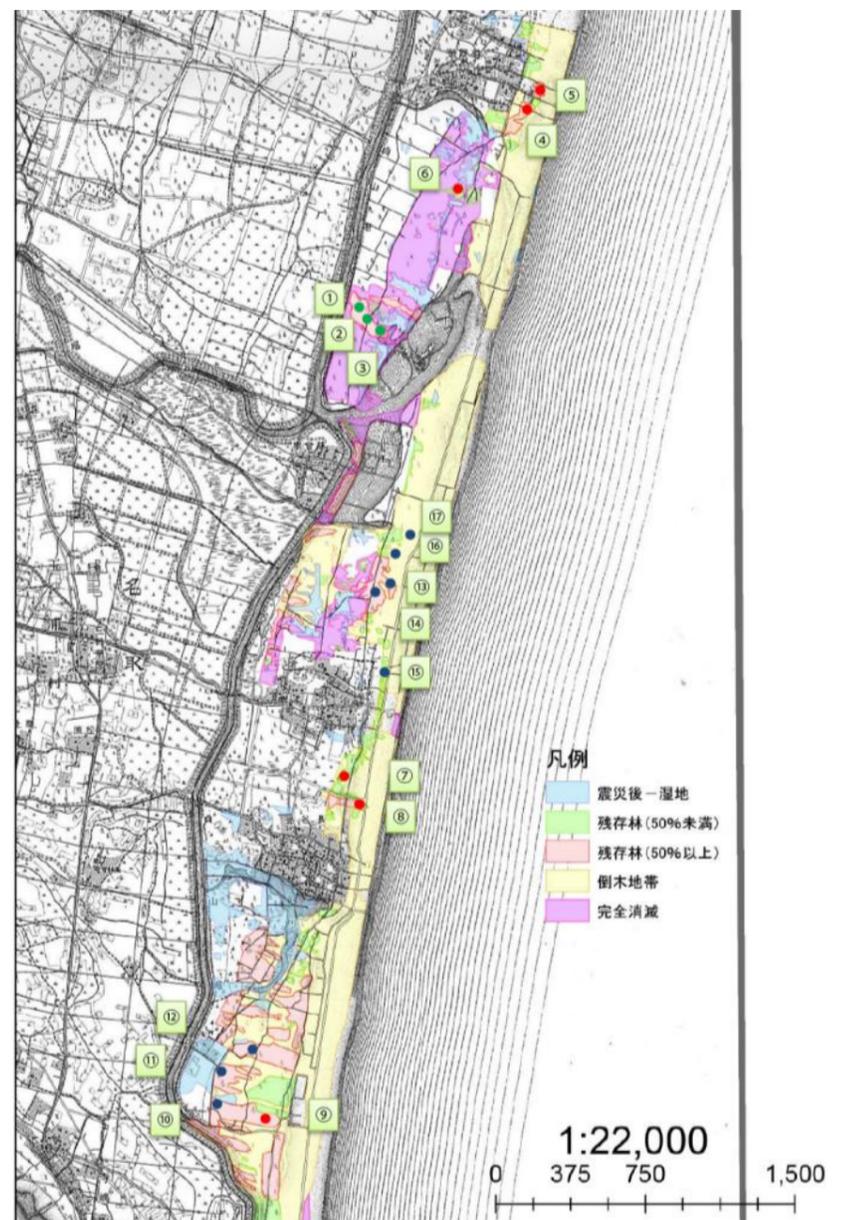
写真1：コナラ



写真2：相の釜集落付近の愛林碑



写真3：境明神社の鳥居（左）と発見された庚申塚（右）



図：調査地点一覧